

## 第11章 考察

### 第1節 出雲における稲作文化の伝播過程

#### - 矢野遺跡の弥生前期土器・石器・木器から -

坂本豊治（出雲市文化財課）

##### はじめに

現在まで続く稲作は、九州に縄文時代中期後半（山崎 2007），出雲には縄文時代晚期後半（以下，時代は省略）に伝播したと考えられる（中沢 2007）。具体的には、飯南町板屋Ⅲ遺跡の糞圧痕土器、松江市石台遺跡の糞圧痕土器や炭化米などが、その根拠とされる。実際に栽培していたことを証明するには、水田を確認することが第一である。しかし、出雲における弥生水田の発掘例は、弥生後期の松江市向小紋遺跡や東出雲町夫敷遺跡、弥生後期～古墳前期の松江市上小紋遺跡などがある程度で、縄文晚期から弥生前期に遡る例は無い。石見に、益田市浜寄・地方遺跡で弥生前期～中期と考えられる水田がある程度である。そこで、稲作の実態を解明するには、稲作とともに伝播してきたと考えられる土器や石器・木器などの道具類を整理する必要がある。しかし、出雲では資料不足のためそれが不十分な状況である。

今回の矢野遺跡第9次調査では、土坑や溝、自然河道から多くの弥生前期の遺物が出土した。これらの遺物の中には、遺構埋土の堆積状況から搅乱や混入の可能性がないと考えられる資料が多い。

そこで、本稿では弥生前期土器の編年を行い、縄文土器（突帯文土器）との関係を整理し、弥生開始期の土器様式を設定する。この土器による時間軸をもとに、石器と木器の農工具についても検討を行い、島根県における弥生開始期の実態に迫りたい。

#### 1. 出雲における弥生時代前期土器・石器・木器の研究の現状と課題

島根県における弥生前期の研究は、土器研究を主体に行われてきた。

その始まりは、1948年の出雲市原山遺跡の調査であった。調査した杉原莊介は、主体となる土器が北九州の立屋敷土器であると評価した（杉原 1948）。

1960年代、全国的な土器集成の流れの中で、島根県においても弥生土器の集成作業が実施された。山本清は、その成果として、弥生土器をI～V様式に分け、編年を作り上げた（山本 1964）。

1970年代には、東森市良らがより充実した島根県の弥生土器集成を発表した（東森ほか 1977）。東森らは、土器の細分化を進め、系譜と他地域との関係を明らかにした。1979年には、村上勇と川原和人が、原山遺跡の再検討を行い、採集品の壺と甕について文様等を中心に型式分類した。その中で、九州の板付I・II式に平行する壺第1・2類と甕第1～3類を「出雲原山式」として設定した。この「出雲原山式」は、「山陰における最古型式の弥生土器と位置付け、「山陰の海岸線を転々と伝播したのではなく、北九州から直接島根半島西端の原山遺跡に進出した」と述べている（村上・川原 1979）。

1980年には東森と西尾克己により矢野遺跡の土器の編年が行われ、弥生前期を矢野Ⅰ式・Ⅱ式の2時期に区分した（東森・西尾 1980）。

1980年代以降、公共事業に伴う発掘調査が増加し、大量の弥生土器が報告されるようになり、突帯文土器と弥生前期土器の両者が出土する遺跡が増えてきた。その例が松江市の石台遺跡、西川津遺跡やタテチョウ遺跡である。1984年に、川原和人が島根県の突帯文土器を整理し、「出雲原山式」土器と突帯文土器が時期的に平行するとした（川原 1984）。1988年に、磯田由紀子は山陰地域の弥生前半期の壺と甕について、文様を主な分類基準とし、前期をⅠ～Ⅳの4時期に区分した（磯田 1988）。松本岩雄は、出雲・隠岐の弥生土器の全器種を対象として、前期を4時期に分けた土器編年を発表した（松本 1992）。現在、松本の編年は出雲で一般的に使用されている。

松本が土器編年を発表する前の1989年には、松江市北講武氏元遺跡の報告がなされた。この遺跡の東区包含層から縄文晩期の突帯文土器と弥生前期土器（松本Ⅰ～2）が層位的に分離できない状態で出土した。報告書では「当地方へ初期農耕文化が伝播し、受容されていく過程を示す貴重な調査例」（鹿島町教育委員会 1989）と評価されている。松本はこの包含層を一括性の高い資料と考え、松本Ⅰ～2様式まで突帯文土器が残存することを示した。1994年には、柳浦俊一が縄文後期中葉～晩期の土器を整理し、最末期の突帯文土器に伴う遠賀川式土器として北講武氏元遺跡の土器をあげている（柳浦 1994）。柳浦も松本と同じく、最末期の突帯文土器と弥生前期中段階の遠賀川系土器が同時期であると評価した。

1999年以降、さらに当該期の土器に関する議論が活発化する。1999年には出雲市蔵小路西遺跡で包含層から遠賀川系土器を伴わない最末期の突帯文土器が出土したと報告がなされた。これを評価したのが藤尾慎一郎である。藤尾は遠賀川系土器のみが出土する原山遺跡には「非在地の人びとが入り込み、蔵小路西遺跡のような在地集団と住み分けていた」可能性を指摘した（藤尾 1999・2000）。

この頃から、濱田竜彦が山陰の縄文晩期土器の編年研究から、遠賀川式土器の位置付けを行っている（濱田竜 2000・2005・2008）。下江健太も山陰の突帯文土器から遠賀川系土器の検討を行っている（下江 2000・2005）。2003年には田畠直彦が、松本編年を用いながら山陰の綾羅木系土器の展開について検討している（田畠 2003）。

1990年代以降、松本Ⅰ～2様式まで突帯文土器が残ることについて、各研究者とも異論がないようである。そこには、根拠となる北講武氏元遺跡の包含層出土土器が同時期の資料という前提がある。しかし、この包含層遺物が同時期の資料であるという証明はなされてはいない。ここに大きな問題がある。遺構及び包含層などの遺物の同時性を立証するには、明確な型式分類を行い、時間的組列の中に資料をあてはめる作業が必要である。具体的には北講武氏元遺跡の場合、遠賀川系土器に時期差がないのかを確認する必要がある。これまでには、一括性の高い良好な資料が無かったため、その検証ができなかった。しかし、矢野遺跡第9次調査の資料は一括性が高く、これらを用いて、弥生前期土器の型式分類を行い、型式組列を組み立てることが可能になった。そこで、出雲の弥生前期の土器編年を構築し、その上で、他地域との平行関係を検討する。これが本稿の第1の作業目的である。

さて、土器以外の研究では、東森市良が、山陰における弥生時代の遺跡の立地を検討し、石器、木

器、青銅器から弥生時代の農耕文化の展開を示している（東森 1971・1972）。

1977 年に、前島己基は石台遺跡の糞痕つきの縄文晚期土器と石鍬を報告し、縄文人と弥生人の関係について述べた（前島 1977）。その後、石台遺跡から縄文晚期の炭化米が出土し（江川・内田 1988）出雲での縄文晚期の稻作が推定された。そして、中沢道彦によって山陰における縄文時代の植物遺存体の研究が行われ、栽培植物の実態が解明されつつある（中沢 2005・2007）。

石器では、1989 年に下條信行が山陰の弥生石器などを型式学的に検討し、北部九州系の文物が段階的に伝播することを指摘した。そして、弥生時代の山陰と北部九州の関係について、直接的な関係、及び、東北部九州を介した間接的な関係の二重性の中で結ばれていたと評価した（下條 1989）。また、下條は柱状片刃石斧の D 型式（下條分類）が、山陰に弥生前期末に伝播するとした（下條 1997）。

その後、石器及び木器の研究については集成作業が主に行われてきた。その中で、中川寧は出雲の弥生から古墳の木製耕起具の分類と変遷を示した（中川 2000）。しかしながら、弥生前期の石器および木器は資料不足の状態であった。今回の矢野遺跡第 9 次調査で新資料が出土したことで、弥生前期の石器及び木器の組成を検討することが可能になった。そこで、石器・木器の組成を作成することが、本稿の第 2 の作業目的である。そして、土器・石器・木器から弥生前期の出雲の様態に迫り、出雲の弥生前期を日本列島の中に位置づけたい。

## 2. 弥生前期の土器編年の構築

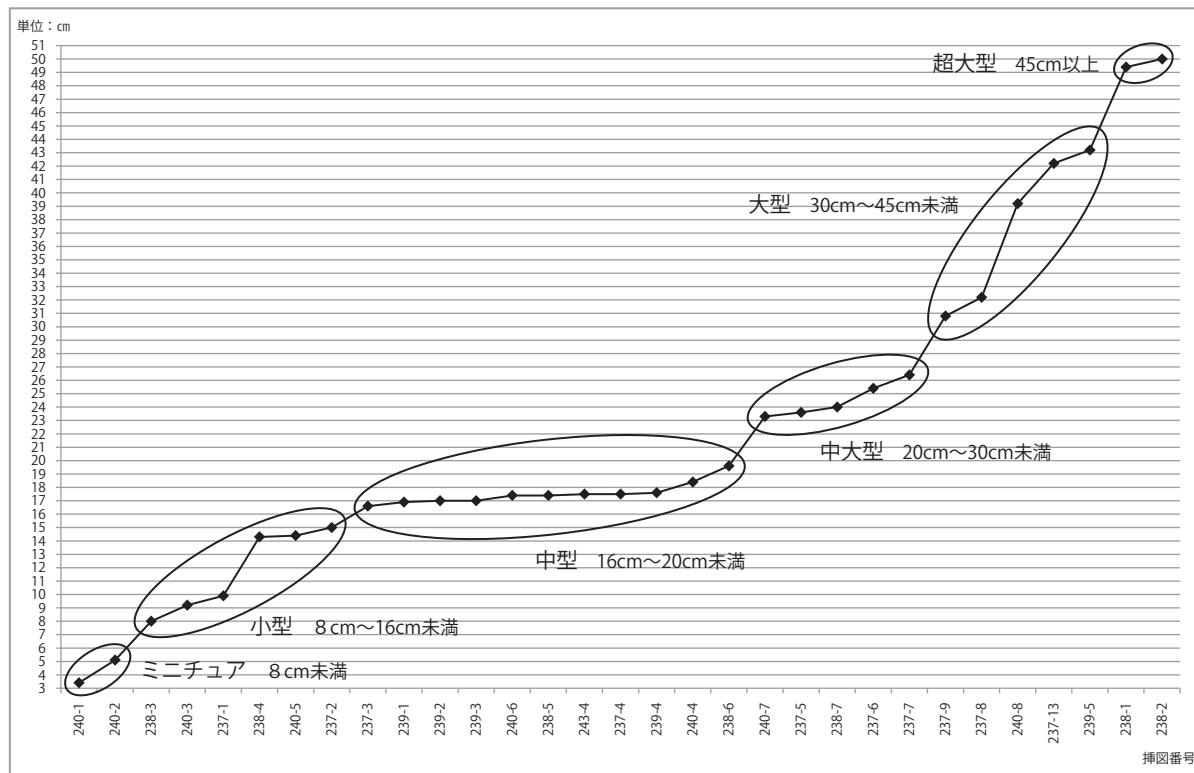
### （1）資料の抽出と分類基準

土器編年を構築するためには、一括性の高い資料を用いた各器種の明確な型式分類が必要である。するために、矢野遺跡第 9 次調査出土土器から一括性の高い資料の抽出を行う。しかし、一括性の高い資料は少なく、それに準ずる短期間に埋没したと考えられる資料を合わせて検討の俎上にのせる。抽出した資料は土坑、溝、自然河道 V 層で、第 7 表に示した<sup>(1)</sup>。なお、自然河道 V 層は多少の時期幅のある資料であるが、今回の検討では重要な資料であるので検討の対象に加えた<sup>(2)</sup>。なぜなら、自然河道 V 層には土坑・溝と共に特徴を持つものと、異なる特徴を持つものがあるからである。今回検討する器種は、壺、甕、甕蓋である。弥生前期土器の一般的な器種である鉢、高杯は一括性の高い資料が少ないため、検討の対象から外した。また、前期末の資料についても数が少なく、対象から外した。

分類基準については、過去の研究者は文様を主としているが、本稿では器形を分類の主な基準とした。また、壺と甕は大きさによって機能が異なると考えられるため、口径により大きさの分類を行った。各土器の大きさと型式名は、第 2 分冊第 9 章の観察表に示した。

### （2）壺の分類

壺の大きさは、容量で分類するのが妥当であるが、容量のわかる資料が少ないと、自然河道 V 層の資料を用い、口径で区分した（第 1 図）。即ち、8 cm 未満のミニチュア壺、8～16cm 未満の小型壺、16～20cm 未満の中型壺、20～30cm 未満の中大型壺、30～45cm 未満の大型壺、45cm 以上の超大型壺の 6 分類である。口径分類で、矢野遺跡でもっとも多く出土しているのは、中型壺と中大型壺である。



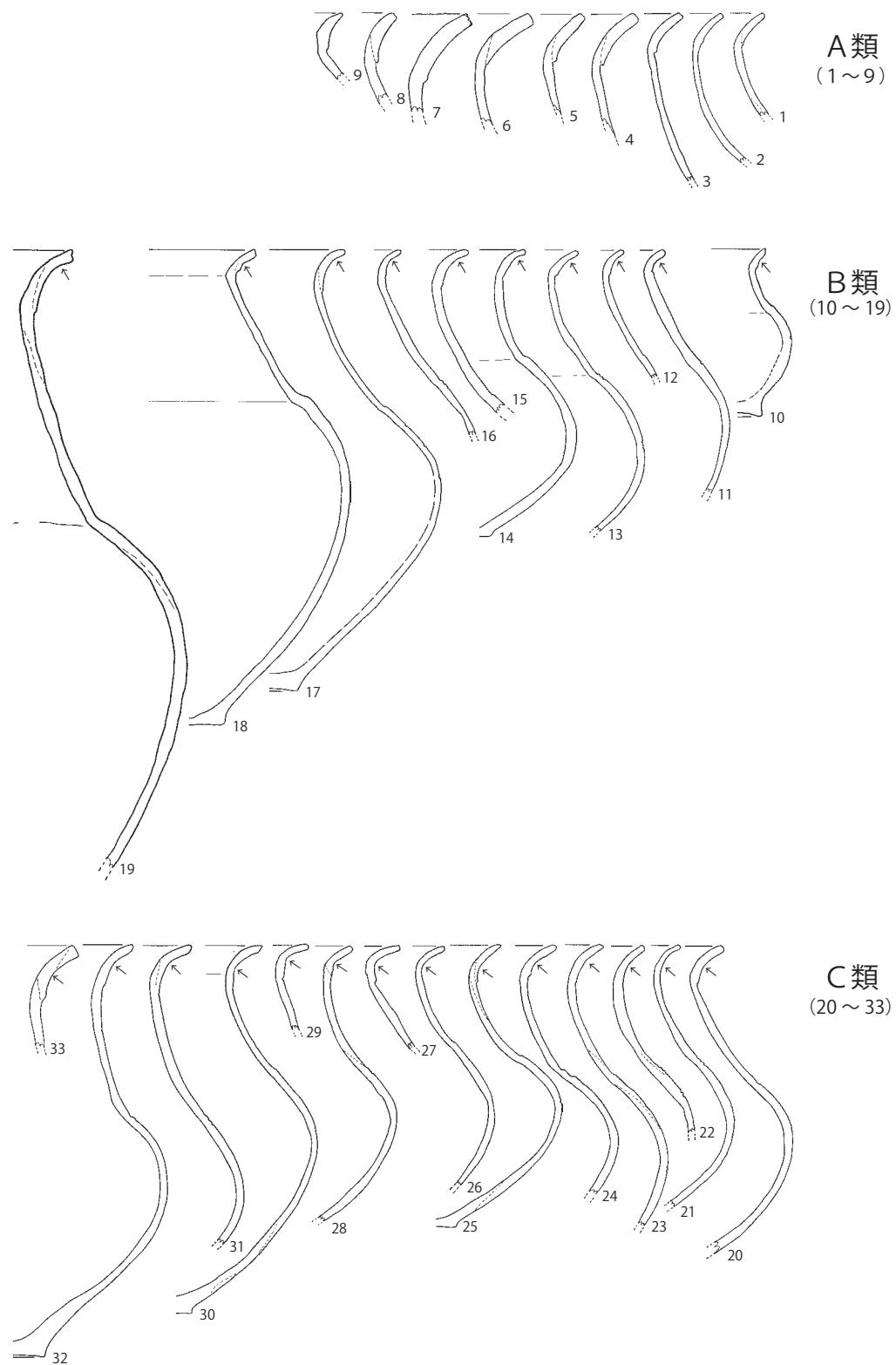
第1図 矢野遺跡自然河道V層 壺 口径分布図

第1表 壺の分類

特徴	A類	B類	C類
①口縁部の形状	a 直線的、もしくは緩やかにカーブ	b 口縁部先端で折れ曲がる	c 口縁部の途中の屈曲が強い（口縁部の屈曲はbよりも強い）、そのため口縁部が長くのびる
②口頸部の区画	段	・段（主体） ・沈線（極少） ・無文（極少） ・突帶（極少）	
③口頸部区画の段の形態	明確な段が巡る	・明確な段が巡る ・低く曖昧な段が巡る	低く曖昧な段が巡る
④口縁端部の処理	面取りを施す	・面取りを施す（主体） ・丸くおさめる	・丸くおさめる ・先細りする
⑤頸胴部の区画	段		・段 ・段+沈線 ・沈線
⑥肩部の文様帯	-		・無文 ・有文
⑦肩部文様帯の施文具	-	ヘラ	・ヘラ ・貝殻（主体）

(大型・超大型壺の肩部は無文)

型式分類はこの2者を中心として行っていく。ミニチュア壺、小型壺、大型壺、超大型壺も以下に示す基準にほぼ準ずる。壺で最も識別しやすい分類要素は、口縁部の形状である。ここには、土器製作時の整形の変化が最も表れていると考えられるからである。口縁部の形状はa・b・cの3つに分類



1~10・12~20・28・32・33:V層, 11・21・22・24・26・27・29・30:SD2626, 23・25:SK3149, 31:SK4135

第2図 壺の断面分類図 (1:6)

第2表 壺の各型式の遺構での出土状況

	壺A	壺B	壺C
自然河道V層	○	○	○
SD2626		○	○
SK2637			○
SK2866 中層			○
SD2371			○
SK3049			○
SK3149			○
SK3157			○
SK3175			○
SK4135			○

でき、その断面の分類を第2図に示した。そして、文様や口縁端部の特徴も含めた7項目の特徴を整理し（第1表）、壺A類・B類・C類に分類した。

壺A類（第2図1～9）の特徴は、①直線的にもしくは緩やかにカーブして開く口縁部（a）で、②口頸部の区画は明確な段が巡るものである。④口縁端部は面取りが施され、小型壺には先細りするものもある。⑤頸胴部の区画は段である。焼成後に黒漆を施した後、口頸部の外面に、横線と縦線の赤彩文（ベンガラ）、口縁部内面に縦線の赤彩文（ベンガラ）が施されるものもある。

壺B類（第2図10～19）の特徴は、①口縁部が先端で折れ曲がり（b）、②口頸部の区画は段の他に沈線があり、段が主体をなす。③口頸部の段の形態は、明確な段の他に、低く曖昧な段が巡るものがある。④口縁端部は面取りを施すものが主体をなす。⑤頸胴部の区画は、段、段と沈線、沈線の3種類がある。⑥肩部の文様は、有軸羽状文、無軸羽状文、山形文、重弧文などで、文様が無いものもある。これらの陰刻文の周辺に、黒漆を施した後に、赤彩（ベンガラ）が施されるものもある。⑦肩部文様の施文具はヘラである。

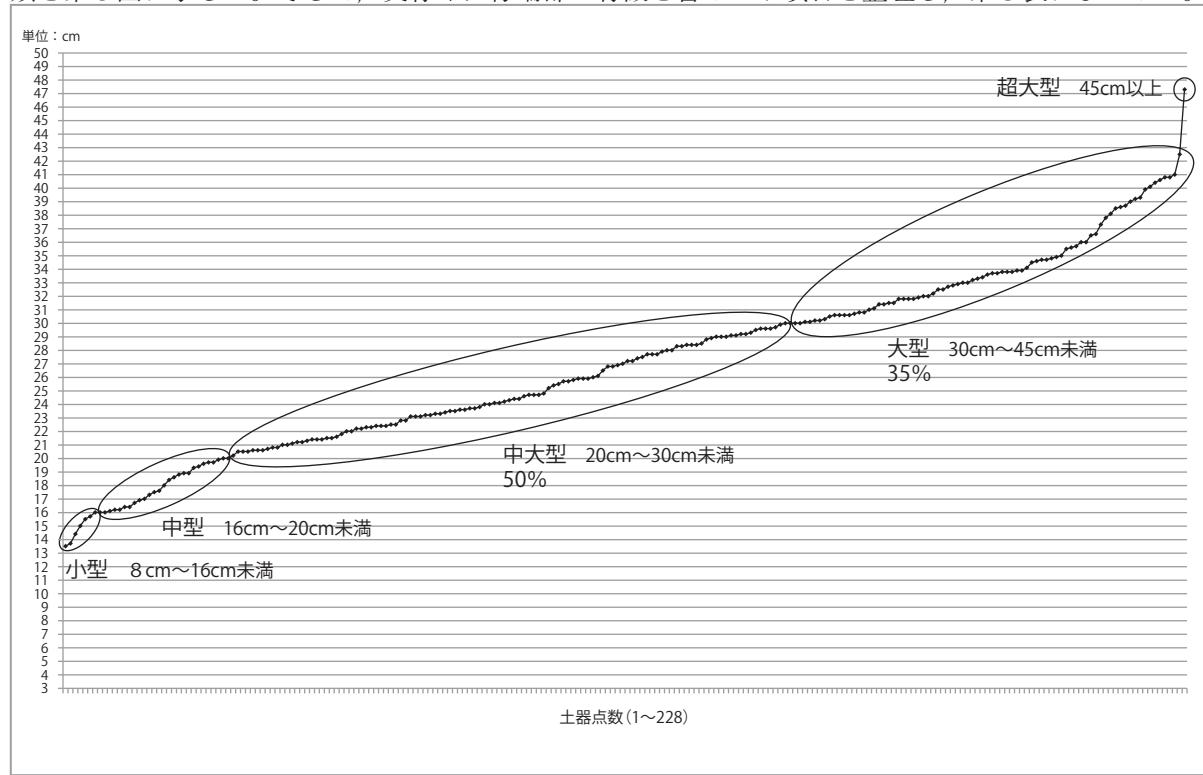
壺C類（第2図20～33）の特徴は、①口縁部途中の屈曲が強く、bより口縁部が長くなる（c）。②口頸部の区画は、段、沈線、突帶などがあり、段が主体で、区画が無いものもある。③口頸部の段の形状は、低く曖昧なものである。④口縁端部は面取り後、丸くおさめるものと、先細りするものがある。大型品には面取りを施すだけのものがある。⑤頸胴部の区画は、段、段と沈線、沈線の3種類がある。⑥肩部の文様は、無軸羽状文、有軸羽状文、重弧文などがあり、無軸羽状文が主体をなす。文様が無いものもある。肩部文様の施文具はヘラと貝殻があり、貝殻が主体をなす。また、壺A～C類の大型・超大型壺には肩部文様が無い。

以上のように、壺A～C類に型式分類を行った。次にこれらの型式組列（前後関係）を考えるため、壺A～C類の遺構ごとの出土状況を第2表にまとめた。壺A類は自然河道V層のみ、壺B類は自然河道V層・SD2626から、壺C類は自然河道V層・SD2626・SK2637・SK2866中層・SD2371・SK3049・SK3149・SK3157・SK3175・SK4135から出土している。このことから、各型式は一部同時併存しながら型式変化していることがわかる。そして、壺A類→壺B類→壺C類の型式組列が導きだせる。特に、①口縁部の形状がa→b→cに変化するとわかったことが重要である。また、肩部の貝殻による施文がC類に出現することもわかった。

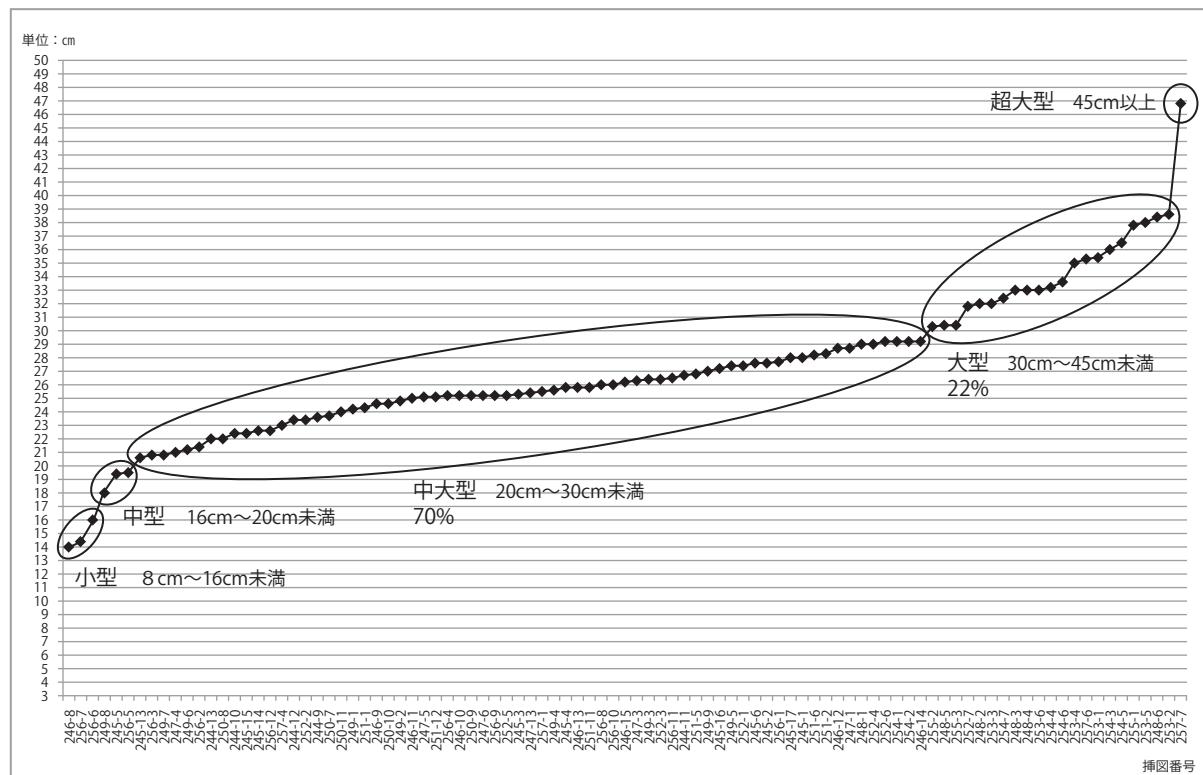
### (3) 瓢の分類

瓢も壺とおなじく自然河道V層の資料を用い、口径で区分した（第4図）。即ち、8～16cm未満の小型甕、16～20cm未満の中型甕、20～30cm未満の中大型甕、30～45cm未満の大型甕、45cm以上の超大型甕の5分類である<sup>(3)</sup>。ミニチュア甕は無い。口径区分から、矢野遺跡でもっとも多く出土しているのは中大型甕で、この中大型甕を主に分類する。小型、中型、大型も以下に示す基準にほぼ準ずる。

甕で最も識別しやすい分類要素は、口縁部の形状である。ここには、土器製作時の整形の変化が最も表れると考えられるからである。甕の口縁部の形状は a・b・c の3つに分類でき、その断面の分類を第5図に示した。そして、文様や口縁端部の特徴を含めた7項目を整理し、第3表にまとめた。



第3図 板屋III遺跡 繩文晩期深鉢 口径分布図



第4図 矢野遺跡V層 甕 口径分布図

第3表 壺の分類

特徴	A類	B類	C類
①口縁部の形状	a 口縁直下から短く外反する	b 口縁部がaと比べて長い	c 口縁部の外反がbより強く、水平に近い。口縁が長いものと短いものがある。
②胴部の張り	・張らない（主体） ・張る	・張らない ・張る	・張る（主体） ・張らない
③口縁端部の特徴	・口縁下端が突出する（主体） ・口縁上端が突出する（極少） ・端部が突出しない（極少）	・口縁上端が突出する ・口縁下端が突出する（極少） ・端部が突出しない	口縁端部が突出しない
④口縁端部の処理	面取する		・面取り後、丸くおさめる（主体） ・面取する（極少）
⑤口縁端面に刻目を施すものの中、刻目を施す位置	下端に刻目を施す		・下端に刻目を施す ・口縁端面の全面に刻目を施す（主体）
⑥口縁直下～胴部上半に段を巡らすものの中、段の位置	・口縁直下に段が位置する（主体） ・胴部上半に段が位置する（極少）	・口縁直下に段が位置する ・胴部上半に段が位置する	
⑦口縁直下～胴部上半の沈線	1条（極少）	1～2条（極少）	・1～3条 ・2条と3条を施すものの中には沈線間に刺突文を施すものあり

第4表 壺の各型式の遺構での出土状況

	壺A	壺B	壺C
自然河道V層	○	○	○
SD2626		○	○
SK2637		○	○
SK2866 中層		○	○
SK3049		○	○
SK2750			○
SK2845			○
SK2866 上層			○
SD2371			○
SK3149			○
SK3157			○
SK4135			○
SK5007			○
SK5009			○

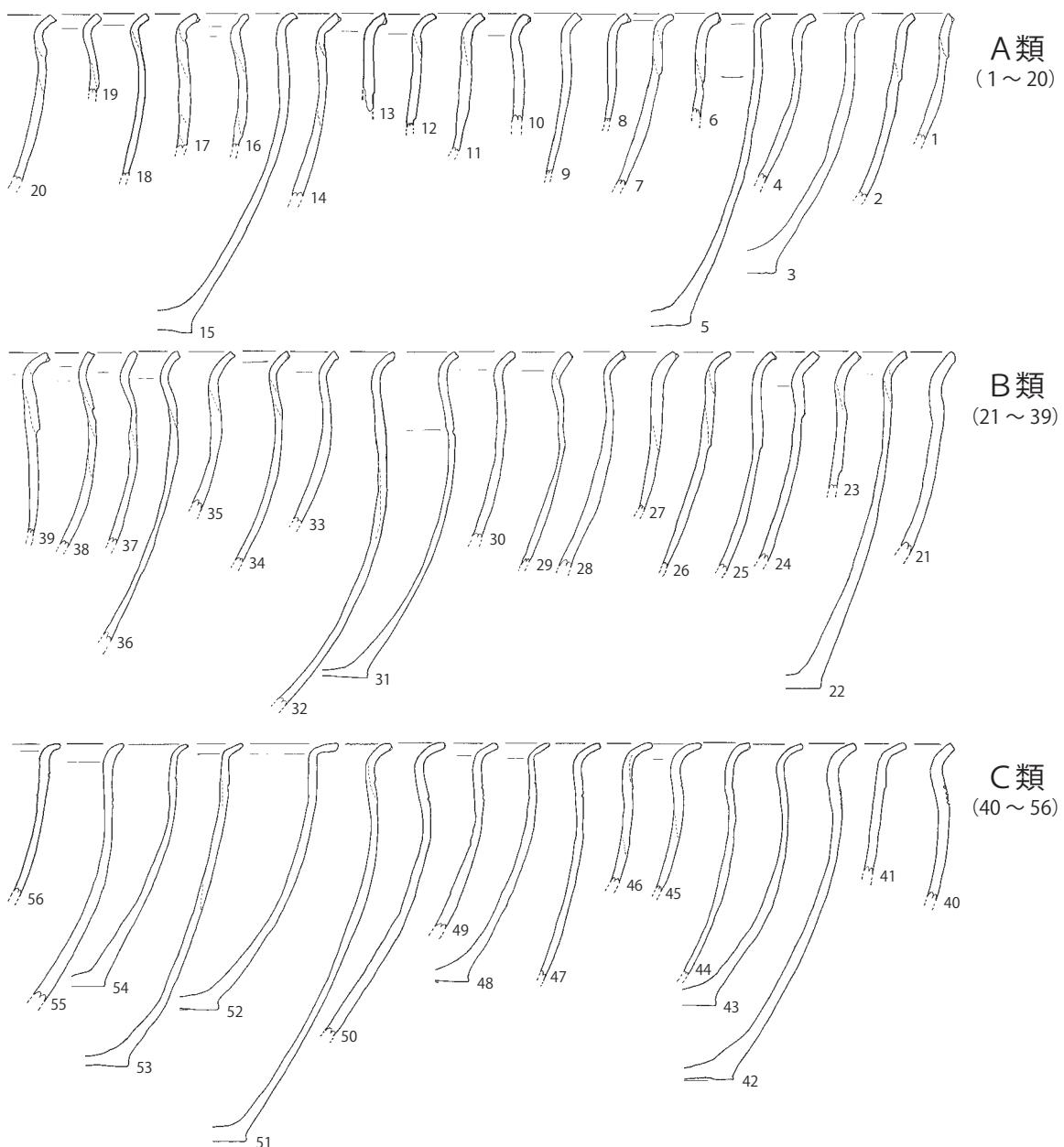
壺A類（第5図1～20）の特徴は、①口縁直下から短く外反する（a）もので、②胴部が張らないものが主体をなす。③口縁端部は、下端が突出するものが多い。⑤口縁端部に刻目を施すものの中では、刻目は下端に施されている。⑥口縁直下～胴部上半に段を巡らすものの中では、口縁直下に段が位置するものが多い。⑦口縁直下に沈線があるものでは、沈線数は1条で出土数は少ない。

壺B類（第5図21～39）の特徴は、①口縁部がaと比べて長い（b）。長いため緩やかに外反する。②胴部が張らないものと張るものがある。③口縁端部は上端が突出するものと下端が突出するもの、突出しないものの3種類がある。④口縁端部は面取りされている。⑤口縁部に刻目を施すものの中では、刻目は下端に施されている。⑥口縁直下～胴部上半に段を巡らすものの中では、口縁直下に段が位置するものと、胴部上半に段が位置するものがある。⑦口縁直下～胴部上半に沈線を巡らすものの中では、沈線の数は1～2条で、出土数は少ない。

壺C類（第5図40～56）の特徴は、①口縁部がbより外反が強く、水平に近いもの（c）で、口縁部が長く、②胴部が張るもののが主体である。③口縁端部が突出したものは無く、④面取り後丸くおさめるものが主体をなす。⑤口縁端部に刻目を施すものの中では、刻目の位置は、下端に施すものと全面に施すものがある。⑥口縁直下～胴部上半に段を巡らすものの中では、口縁直下に段が位置するものと、胴部上半に段が位置するものがある。段は低く曖昧である。⑦口縁直下～胴部上半に沈線を

すものの中では、刻目は下端に施されている。⑧口縁直下～胴部上半に段を巡らすものの中では、口縁直下に段が位置するものと、胴部上半に段が位置するものがある。⑨口縁直下～胴部上半に沈線を巡らすものの中では、沈線の数は1～2条で、出土数は少ない。

壺C類（第5図40～56）の特徴は、①口縁部がbより外反が強く、水平に近いもの（c）で、口縁部が長く、②胴部が張るもののが主体である。③口縁端部が突出したものは無く、④面取り後丸くおさめるものが主体をなす。⑤口縁端部に刻目を施すものの中では、刻目の位置は、下端に施すものと全面に施すものがある。⑥口縁直下～胴部上半に段を巡らすものの中では、口縁直下に段が位置するものと、胴部上半に段が位置するものがある。段は低く曖昧である。⑦口縁直下～胴部上半に沈線を



1~20・22~31・33~39:V層, 21・32・40・41・50・55・56:SD2626, 42・46:SK2866上層, 48・53・54:SK2866中層  
43~45・51・52:SK2637, 47:SK3149, 49:SK3049

第5図 壺の断面分類図（1：6）

巡らすものの中では、沈線の数は1~3条である。沈線を2~3条施すものの中には、沈線間に刺突文を施すものもある。

壺A・B類は口縁直下に段が巡る壺が主体をなし、壺C類は口縁直下に沈線が巡るもののが主体である。また、壺A~C類は、口縁端部に刻目を施すものと施さないのものが、口縁直下~胴部上半の段や沈線と組み合わさり、色々な文様が使われている。

以上のように、壺A~C類に型式分類を行った。次にこれらの型式組列（前後関係）を考えるために、壺A~C類の遺構ごとの出土状況を第4表にまとめた。壺A類は自然河道V層のみ、壺B類は自然河道V層・SD2626・SK2637・SK2866中層・SK3049から、壺C類は自然河道V層・SD2626・

SK2637・SK2866中層・SK3049・SK2750・SK2845・SK2866上層・SD2371・SK3149・SK3157・SK4135・SK5007・SK5009から出土している。このことから、各型式は、一部同時併存しながら型式変化していることがわかる。そして、甕A類→甕B類→甕C類の型式組列が導きだせる。特に、①口縁部の形状がa→b→cに変化するとわかったことが重要である。

#### (4) 甕蓋の分類

甕蓋の口径は約20～28cmの範囲におさまり、先ほどの甕の口径分類によれば、中型甕と中大型甕の蓋と考えられる。甕蓋は天井部の形状などをもとに分類した。検討の結果、甕蓋A～C類の3つに分類でき、甕蓋の分類図を第6図に示した。そして、器高と調整の特徴を整理し、第5表にまとめた。

甕蓋A類（第6図1・2）の特徴は、①天井部が深く窪むものである。②器高は約13cmで高い。③裾部は直線的に開き大きく広がらない。④全面にハケメが施されている。

甕蓋B類（第6図3～7）の特徴は、①天井部の中央が浅く窪み、その周辺が面をなす上げ底状のものである。②器高は約10～14cmで高い。③裾部は甕蓋A類より長く、外側に開く。④調整は、ハケメを施すものが主体をなし、ハケメにミガキを加えるものがわずかにある。

甕蓋C類（第6図8～12）の特徴は、①天井部全体が浅く窪むものと天井が平坦で窪まないものがある。②器高は7～10cmで甕蓋A・B類よりは低い。③裾部は甕蓋B類と同じように開くものや長く真横に開くものがある。④調整はミガキを施すものが主体をなし、ハケメがわずかに残る。

以上のように、甕蓋A～C類に型式分類を行った。次にこれらの型式組列（前後関係）を考えるため、甕蓋A～C類の遺構ごとの出土状況を第6表にまとめた。甕蓋A類は自然河道V層のみ、甕蓋B類は自然河道V層・SD2626・SD2371から、甕蓋C類は自然河道V層・SD2626・SD2371・SK2637・SK2845・SK4135から出土している。このことから、各型式は、一部同時併存しながら型式変化していることがわかる。そして、甕蓋A類→甕蓋B類→甕蓋C類の型式組列が導きだせる。特に、天井部の形状がa→b→cに変化するとわかったことが重要である。また、器高が高いものから低いものへ、ハケメからミガキへ変化することもわかった。

#### (5) 様式の設定

前述のように壺、甕、甕蓋のそれぞれの型式分類・型式組列を検討した。そして、各器種の各型式の共存関係を第7表にまとめた。すると、「壺A類+甕A類+甕蓋A類」→「壺B類+甕B類+甕蓋B類」→「壺C類+甕C類+甕蓋C類」への変化と型式の組み合わせを導き出せた。したがって、「壺A類+甕A類+甕蓋A類」を矢野1式、「壺B類+甕B類+甕蓋B類」を矢野2式、「壺C類+甕C類+甕蓋C類」を矢野3式として様式を設定することができる（第8・9図）。

第9図54の無頸壺、55の高杯は矢野3式に伴う。56・57は土笛で矢野2～3式に伴うものである。なお、松江市堀部第1遺跡第5号標石墓（矢野3式）の近くから土笛が出土していて、土笛は矢野3式に伴う可能性が高い<sup>(4)</sup>。

#### (6) 山陰の他遺跡資料との比較

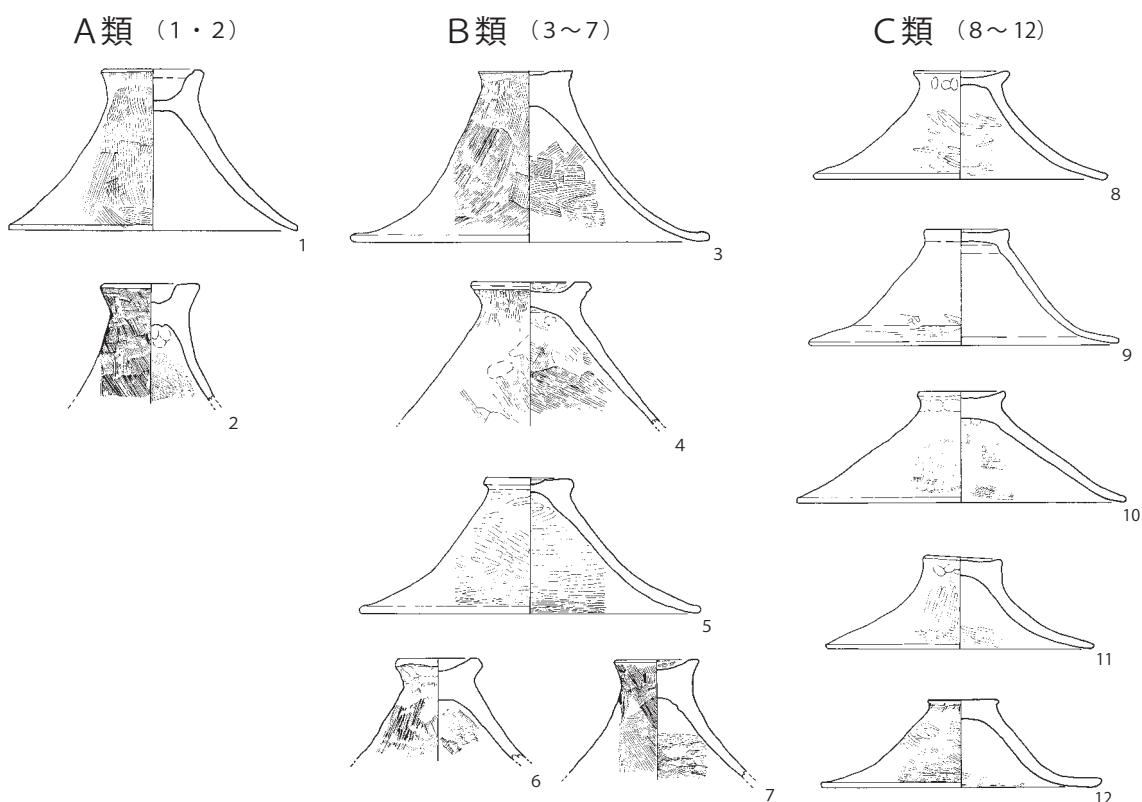
矢野遺跡第9次調査の資料で、矢野1式～3式の様式を設定した。ここで問題となるのは、矢野1式、2式、3式にそれぞれの単純期が存在するか否かである。矢野遺跡の土坑資料から、矢野3式に単純

第5表 蔽蓋の分類

特徴	A類	B類	C類
①天井部の形状	a 天井の中央が深く窪む	b 天井の中央が浅く窪む	・ c 天井の全体が浅く窪む ・ c 天井が平坦で窪まない
②器高	約 13cm (高い)	約 10 ~ 14cm	約 7 ~ 10cm (低い)
③裾部の形状	短く直線的に開く	A類より長く外側に開く	・ B類と同じように開く ・ B類より長く、水平に開く
④調整	ハケメのみ	・ ハケメのみ (主体) ・ ハケメ・ミガキ	・ ミガキのみ (主体) ・ ミガキ・ハケメ

第6表 蔽蓋の各型式の遺構での出土状況

	A類	B類	C類
自然河道V層	○	○	○
SD2626		○	○
SD2371		○	○
SK2637			○
SK2845			○
SK4135			○



1~4・6・7 : 矢野遺跡V層, 5・10 : 矢野遺跡 SD2626, 8 : 矢野遺跡 SK5007, 9・12 : 矢野遺跡 SK2637, 11 : 矢野遺跡 SK2845

第6図 蔽蓋の分類図 (1:6)

期が存在するのは確実であるが、1式・2式に関しては矢野遺跡の資料だけでは検討できない。そこで、矢野編年を山陰の他遺跡にあてはめ、壺と甕の共存状況を第8表に示す。良好な資料が少ないが、大田市五丁遺跡C区SR-05上層、出雲市築山遺跡SX3198、鳥取県米子市長砂第4遺跡包含層、鳥取県東伯郡湯梨浜町長瀬高浜遺跡SI156・SI71は矢野2式から始まる資料であることがわかる。矢野3式に単純期があることから、矢野2式にも単純期があると考えられる。そして、矢野2式・3式の単純期があることから、矢野1式にも単純期があることが導きだせる。また、松本編年との関係は、出雲I-1様式が矢野1～2式、I-2様式が矢野3式に対応する。

次に問題となるのは、縄文土器との関係である。第8表には山陰の遠賀川系土器と伴う縄文晩期後半の突帯文土器の特徴をまとめている。まず、研究史で取り上げた北講武氏元遺跡の包含層資料の遠賀川系土器は、矢野1～3式までの時期幅がある資料であることがわかった。そうすると、縄文土器（以下、突帯文土器とする）が矢野3式（松本I-2）まで残るとは言えないことがわかった。

次に、遠賀川系土器と時間的に一番近い突帯文土器を特定する必要がある。突帯文土器の特徴をあげると、津和野町大蔭遺跡、雲南省万場I遺跡黒色シルト層からは、刻目が深い刻目突帯文深鉢（X類）と刻目が浅い刻目突帯文深鉢（Y類）が出土している。北講武氏元遺跡東区下層、米子市古市流田遺跡SX2からは刻目が浅い刻目突帯文深鉢（Y類）と無刻目突帯文深鉢（摘み出したような突帯文）（Z類）が出土している。五丁遺跡C区SR-04、出雲市蔵小路西遺跡包含層からは、無刻目突帯文深鉢（摘み出したような突帯文）（Z類）のみが出土している。これらの突帯文土器の組み合わせは、X・Y類、Y・Z類、Z類のみである。したがって、時間的な前後関係は、X類（古い）→Y類→Z類（新しい）と考えられる。ここで重要なのは、蔵小路西遺跡のZ類に遠賀川系土器が伴っていないことで、つまり、突帯文土器の一番新しいZ類が遠賀川系土器よりも時間的に先行すると考えられることである。そうすると、突帯文土器のZ類に一番近い遠賀川系土器が矢野1式であると推定できる。Z類と矢野1式が伴って出土している遺跡は、五丁遺跡C区SR-04、北講武氏元遺跡包含層、古市流田遺跡SX2がある。したがって、これらの遺跡では突帯文土器Z類と矢野1式が共存する可能性もあると考えられる。そして、突帯文土器Z類が出土せず矢野1式のみが出土する遺跡に、出雲市矢野遺跡、原山遺跡がある。そこで、矢野1式の直前もしくは矢野1式と共に考えられる突帯文土器との時間的な関係を第9表に示す<sup>⑤</sup>。まず、土器型式は、X類→Y類→Z類→矢野1式→矢野2式→矢野3式の流れが考えられる。時間的な関係を遺跡で示すと、突帯文土器（Z類）のみの蔵小路西遺跡の①段階、突帯文土器（Z類）と遠賀川系土器（矢野1式）が共存する北講武氏元遺跡・五丁遺跡・古市流田遺跡の②段階、遠賀川系土器（矢野1式）のみの矢野遺跡・原山遺跡の③段階があること推定できる。したがって、現状では第8図の矢野1式に無刻目突帯文土器（10）を位置づけておきたい。

そして、遠賀川系土器は過去に言われていたような「北九州から直接島根半島西端の原山遺跡に進出した」（村上・川原1979）わけではなく、矢野1式に山陰の海岸線を転々と伯耆まで伝播したことがわかった（第7図）。隠岐では月無遺跡で矢野2式の甕が出土している。この時期までには隠岐にも遠賀川系土器が伝播しているであろう。また、原山遺跡と蔵小路西遺跡との関係は、藤尾慎一郎が提唱したような「非在地集団と在地集団の住み分け」ではなく、土器の出土状況・型式から考えて、時

第7表 壺と甕と甕蓋の各型式の共存関係

型式 遺構	壺A	甕A	甕蓋 A	壺B	甕B	甕蓋 B	壺C	甕C	甕蓋 C
自然河道V層	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SD2626				○	○	○	○	○	○
SK2637					○		○	○	○
SK2866 中層					○		○	○	
SK3049					○		○	○	
SD2371						○	○	○	○
SK4135							○	○	○
SK3149							○	○	
SK3157							○	○	
SK3175							○		
SK2845								○	○
SK2750								○	
SK2866 上層								○	
SK5007								○	
SK5009								○	

第8表 山陰の突帯文土器と遠賀川系土器の関係

遺跡・遺構	突帯文土器	矢野 1式		矢野 2式		矢野 3式	
		壺A	甕A	壺B	甕B	壺C	甕C
万場 I 遺跡	黒色シルト層	X類 刻目が深い刻目突帯文 Y類 刻目が浅い刻目突帯文					
大蔭遺跡	包含層	X類 刻目が深い刻目突帯文 Y類 刻目が浅い刻目突帯文	○	○		○	
蔵小路西遺跡	包含層	Z類 無刻目突帯文 (摘み出したような突帯文)					
五丁遺跡	C区 SR - 04	Z類 無刻目突帯文 (摘み出したような突帯文)		○	○	○	○
	C区 SR - 05 上層	Y類 刻目が浅い刻目突帯文			○	○	○
	D区 SR - 05 上層					○	○
北講武氏元遺跡	東区下層	Y類 刻目が浅い刻目突帯文 Z類 無刻目突帯文 (摘み出したような突帯文)	○			○	○
	東区中層	Z類 無刻目突帯文 (摘み出したような突帯文)	○	○		○	○
矢野遺跡	自然河道V層		○	○	○	○	○
	溝 SD2626				○	○	○
	土坑 SK3145・4135					○	○
原山遺跡	包含層		○	○	○	○	○
築山遺跡IV	SX3198			○	○	○	○
堀部第1遺跡	包含層		○	○	○	○	○
古浦遺跡	包含層					○	○
古市流田遺跡	SX2	Y類 刻目が浅い刻目突帯文 Z類 無刻目突帯文 (摘み出したような突帯文)	○				○
長砂第4遺跡	包含層	Y類 刻目が浅い刻目突帯文				○	○
長瀬高浜遺跡	SI156				○	○	○
	SI71				○	○	○
	SK03						○

期差であると考えられよう。

#### (7) 他地域との平行関係

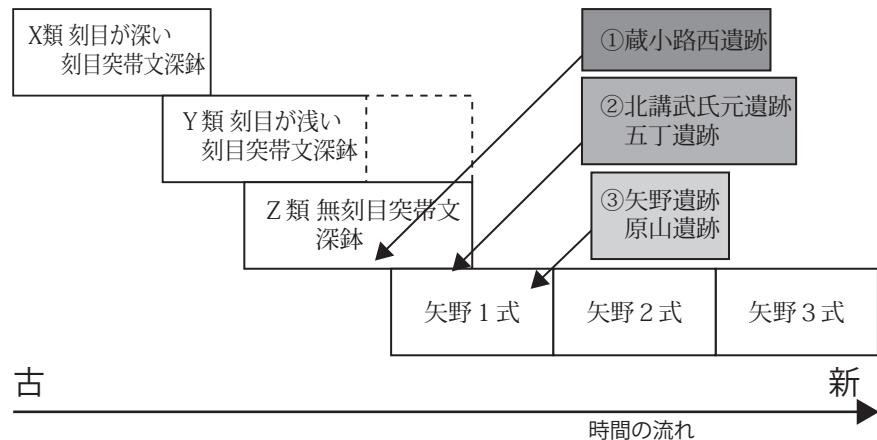
矢野1～3式を日本列島の弥生前期に位置付けるには、他地域との平行関係を示さなければならぬ。まず、矢野1式と共に存する無刻目突帯文土器は、濱田竜彦が近畿の長原式の新段階に位置付けている（濱田2008）。

他地域との平行関係を考える際に有効な方法は、搬入品により地域間の編年を結び付けることである。しかし、出雲での搬入品はごくわずかであり、また、在地土器との関係も不十分な状況であり、検討できない。そこで、遠賀川系土器として系譜が同じである西部瀬戸内と東北部九州の壺の形状的な特徴を矢野分類（第1表壺の分類の①口縁部の形状）にあてはめて検討してみたい<sup>(6)</sup>。まず、長門の下関市綾羅木郷遺跡の綾羅木I式の壺は矢野分類では壺bに分類できる特徴を持つ。よって、矢野2式に平行するものと考えられる。そして、綾羅木II式とされている壺は矢野分類では壺cに分類できる特徴を持つ。よって、矢野3式に平行するものであろう。また、周防の山口市小路遺跡12号溝は矢野の壺a～cに分類できる特徴を持つもので、矢野1～3式に平行し、時期幅がある資料であることがわかった。

ここで、矢野遺跡の自然河道V層（矢野1～3式）から出土した第9図53の円形粘土帶土器（朝鮮系無文土器）の時期を検討したい。円形粘土帶土器は平行関係を考えるうえで指標にできる資料である。山口県下関市吉永遺跡SD301、綾羅木郷遺跡LN203から出土していて、共伴する土器は綾羅木II式で、矢野3式と平行し、この資料が山口県で最古のものである。よって、矢野遺跡の円形粘土帶土器も矢野2式に遡るとは考えにくく、矢野3式に平行すると考えられる。福岡平野では板付II式中段階で登場する。したがって、矢野3式が山口の綾羅木II式、北部九州の板付II式中段階に平行すると考えられよう。また、出雲市原山遺跡からも弥生前期の朝鮮系無文土器が出土しているとされてきたが、李昌熙が口縁端部断面が橢円形であり、円形から三角形に変化する途中の段階と評価し、弥生時代の中期内に平行する時期のものとした（李2009）。

そうすると矢野2式は、北部九州の板付II式古段階と平行する可能性がある。ここで、問題となるのは、矢野1式の位置付けである。矢野1式が板付II式古段階の前半に平行するか、板付I式新段階に平行するかである。そこで、東北部九州の下稗田遺跡、葛川遺跡、大井三倉遺跡の壺の形状を矢野分類にあてはめてみたい。福岡県行橋市下稗田遺跡の下稗田I式の壺は、矢野分類の壺bと壺cにあたる。そして、下稗田II式の壺は矢野分類の壺cと前期末の壺が含まれている。よって、下稗田I式は矢野2～3式、下稗田II式は矢野3式～前期末に平行する。福岡県京都郡刈田町葛川遺跡環濠の壺は、矢野分類の壺a～c類にあたる。よって、葛川遺跡環濠は矢野1式～3式に併行する。福岡県宗像市大井三倉遺跡2号溝の壺は矢野分類の壺aと壺bと、壺aより古い型式がある。この古い型式とは、口縁部が短く折れ曲がるものと、口縁部前面に粘土を貼り付け段を作り出すものである。この古い型式は北部九州の板付I式新に併行すると考えられ、矢野分類の壺aとは異なるものである。よって、大井三倉2号溝は、板付I式新～板付II式古に平行し、その一部が矢野1・2式に平行すると考えられる。また、甕蓋は板付II式古段階から出現する。矢野1式に甕蓋が伴うことなどから、矢野1

第9表 矢野1式の直前もしくは矢野1式と共に存すると考えられる突帯文土器との時間的な関係



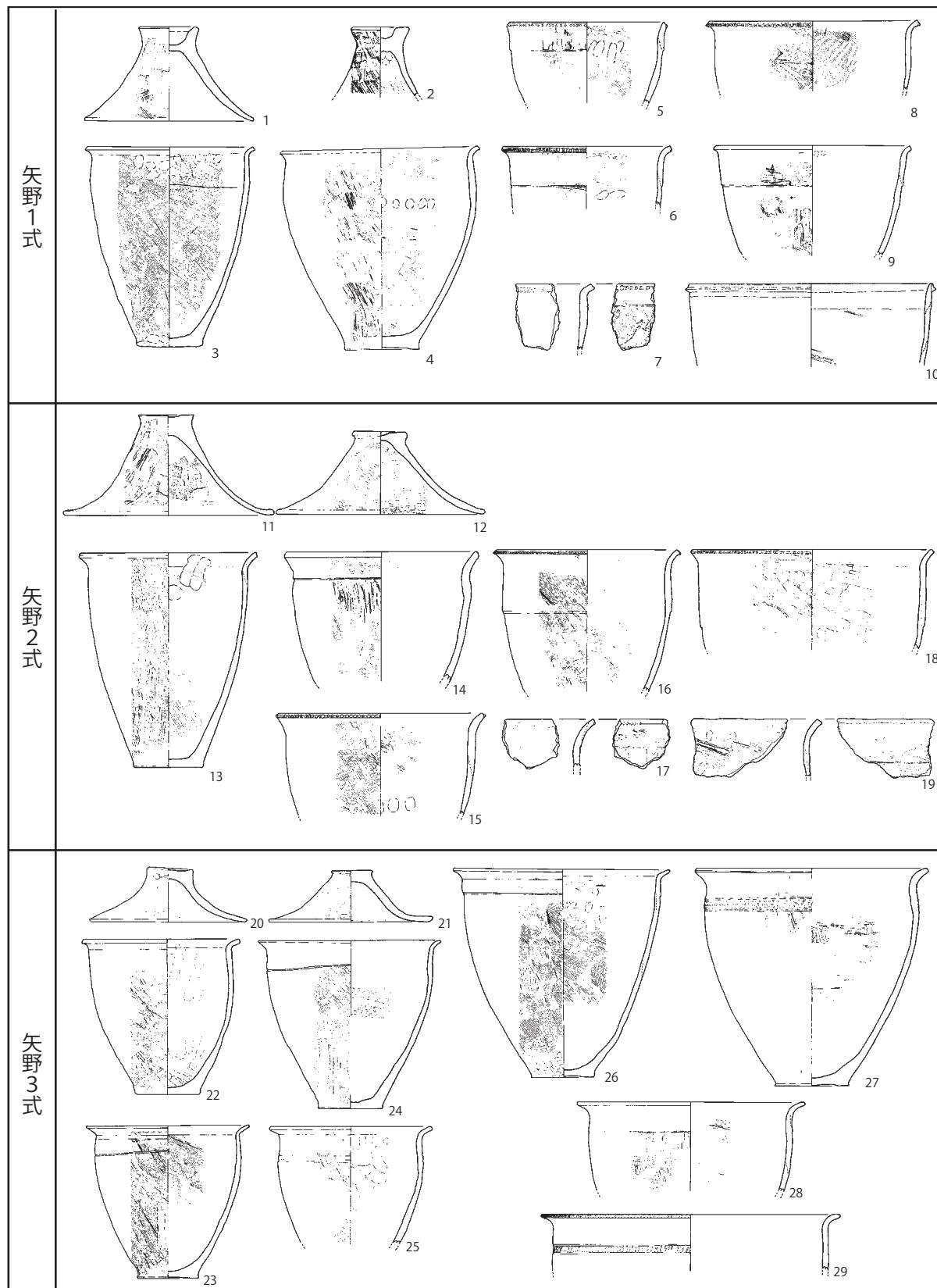
第10表 矢野編年と他地域との平行関係

時期 \ 地域	北部九州	東北部九州	周防	長門	石見	出雲	伯耆
弥生時代 前期中葉	板付Ⅱ古前半	(大井三倉 2号溝) (葛川環濠)	小路12号溝	(延行)	(大蔭)	松本I-1	矢野1式 (古市流田)
	板付Ⅱ古後半			綾羅木Ⅰ式	松本I-1		矢野2式 (長瀬高浜) (長砂第4)
前期後葉	板付Ⅱ中	下稗田Ⅰ 下稗田Ⅱ		綾羅木Ⅱ式	松本I-2	松本I-2	矢野3式 清水I-1・2
	前期末			綾羅木Ⅲ式	松本I-3	松本I-3・4	- 清水I-3

( ) は時期幅がある資料



第7図 本稿で取り上げた遺跡の位置

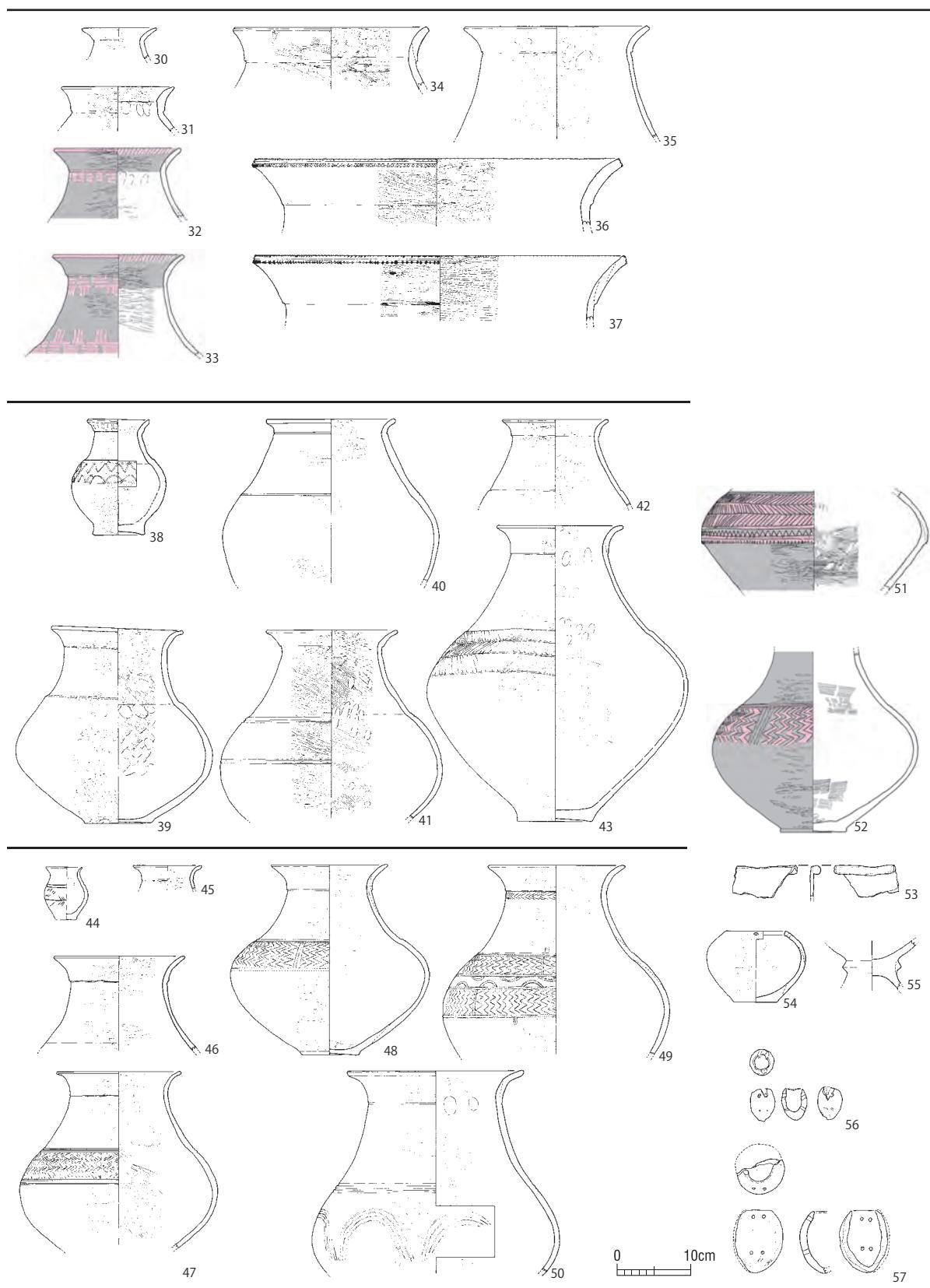


【出土遺跡】8・11・13・15・16・18・22：矢野遺跡V層，10：北講武氏元遺跡，12・14：矢野遺跡SD2626，17・21：矢野遺跡SK2637，

19・23・24・26～28：矢野遺跡SK2866，20：矢野遺跡SK2845，25：矢野遺跡SK3049，29：矢野遺跡SK4135

【器種】1・2・11・12・20・21：甕蓋，3～9・13～19・22～29：甕，10：深鉢

第8図 矢野1式～3式の土器編年（1）（1：8）



【出土遺跡】30～39・41～45・51～53：矢野遺跡V層，40・47・55～57：矢野遺跡SD2626，46：矢野遺跡SK2866，48・49・54：矢野遺跡SK3149，  
50：矢野遺跡SK4135

【器種】 30～52：壺，53：円形粘土帶土器，54：無頸壺，55：高杯，56・57：土笛

第9図 矢野1式～3式の土器編年（2）（1：8）

式が板付Ⅰ式には遡らないといえよう。平行関係をまとめると、葛川遺跡は北部九州の板付Ⅱ式古段階に平行する資料である（梅崎2000）ことから、矢野1式は板付Ⅱ式古段階前半、近畿では長原式の新段階、矢野2式は板付Ⅱ式古段階後半、矢野3式は板付Ⅱ式中段階に平行すると考えられよう。以上のような平行関係を第10表にまとめた。その結果、弥生前期前葉を板付Ⅰ式とすると、弥生前期中葉が矢野1・2式、弥生前期後葉が矢野3式、弥生前期末が松本I-3・4となる。これにより、出雲の弥生前期を日本列島に位置付けることができた。

#### (8) 土器からわかる弥生前期の稻作

はじめに触れたように、糞圧痕土器から縄文晚期後半に稻作が出雲に伝わったことがわかっている。その後の土器の変化についてまとめたい。

まず、煮沸土器の容量変化についてである。第3図に縄文晚期の飯南町板屋Ⅲ遺跡の深鉢を弥生甕と同じ基準で、大きさを区分した。すると、大型深鉢が全体の35%、中大型深鉢が50%であることがわかる。検討資料が少ないため図示していないが、出雲市三田谷Ⅰ遺跡では、縄文晚期に大型深鉢が約50%、中大型深鉢が約35%で、大型深鉢が中大型深鉢よりも多いデータを得た。第4図の矢野遺跡自然河道V層の弥生甕は大型甕が全体の約22%、中大型甕が約70%であり、弥生時代になると縄文時代に比べ大型の煮沸土器が減少し、中大型の煮沸土器が増加したことがわかる<sup>(7)</sup>。この比較は、時期幅が長い資料での検討であるが、おおまかな傾向はあらわれているであろう。このような容量の比較は、佐藤由紀男や濱田延充が地域ごとに詳細に行っており（佐藤2000、濱田延2000）、出雲でも精度をあげて研究する必要がある。佐藤は、大型品の比率が高いのは堅果類の使用比率が高いことに関連すると想定している。出雲では、弥生時代になると大型品の比率が減少するので、堅果類の使用が少なくなり、コメを炊く比率が多くなったことが想定できるであろう<sup>(8)</sup>。

次に、甕蓋について検討したい。甕蓋は中型、中大型甕用として作られたものである。甕蓋の詳細な検討は伊藤実が行っている（伊藤2004）。伊藤は、甕蓋は縄文時代ではなく、弥生時代に出現するもので、「ふっくらご飯」を食べるためには必要なものとし、また、甕の口縁が外反するのは甕蓋を受けるためと評価した。矢野分類の甕A類～C類へ口縁部の屈曲が強くなることと、甕蓋A類～C類へ裾部が長く真横に開く変化は連動していて、それは伊藤の説明でよくわかる。また、器高が高い甕蓋A類から低い甕蓋C類への変化は、熱効率をよくすることや圧力をかけて炊飯するためであろう。

このように、出雲でも弥生前期にはコメを中型・中大型甕で炊いて、食していたと考えられ、土器からも出雲の稻作伝播の状況が窺える<sup>(9)</sup>。

### 3. 弥生前期の石器組成

出雲の弥生前期土器編年を軸に、弥生前期の石器組成をまとめたい。まず、縄文晚期の石器組成について触れておく。

縄文晚期の出雲の石器は、打製石鏃、刃器類、石匙、石錐、楔形石器、RF（2次加工のある剥片）、石鋤、伐採石斧、片刃石斧、磨石、敲石、凹石、石皿、石錘、石棒、環状石斧などがある。特に出雲では剥片石器の素材は、安山岩が主体をなし、黒曜石などの他の石材はごくわずかの使用である。伐採石斧

の形状は、乳棒状石斧や、基部が尖るもの、断面が扁橢円形のもので、厚さは2～3cm台のものがある。石鋤は大型のものが目立つ。刃器は打製のもので、磨製のものは無い。

今回は弥生前期の石器組成を一つの様式としてまとめた<sup>(10)</sup>。本項では矢野遺跡第9次調査の資料を用い、また他遺跡の資料も合わせて、島根県の弥生前期中葉～前期末の石器組成を第10図に示した。当該期の石器組成は、縄文晩期から継続するものとして、石鋤（1～3）、石棒（4・5）、伐採石斧（6～9）、敲石・凹石（10・11）、剥片石器（21～26）、石錐（32・33）、UF（使用痕のある剥片）（34）、楔形石器（35～37）、時期が特定できなかったが石皿や環状石斧なども含まれるであろう。また、弥生時代に新來した石器（大陸系磨製石器）は、磨製の大型石庖丁（27）、石庖丁（28・29）、石鎌（31）、扁平片刃石斧（12～15）、柱状片刃石斧（16・17）、ノミ状片刃石斧（18）、紡錘車（19・20）、磨製石剣（30）、磨製石鎌（42）などがあげられる。

以上、島根県における弥生前期の石器組成は、縄文から継続する石器が主体をなす。伐採石斧は、厚さが薄く（7・8）、乳棒状のもの（6）、基部が尖るものが多いことも縄文的である。厚さが増し、基部幅が広がり（9）弥生化（太形蛤刃石斧と呼べるもの）するのは弥生前期末以降であろう。また、敲石や凹石（10・11）、剥片石器が多く使用されているのも特徴的である。剥片石器の素材は、黒曜石が主体をなし、わずかに安山岩、瑪瑙などが使われ、縄文晩期の剥片石器の素材とは大きく変化している。剥片石器素材の流通ルートが変化したのであろうか。

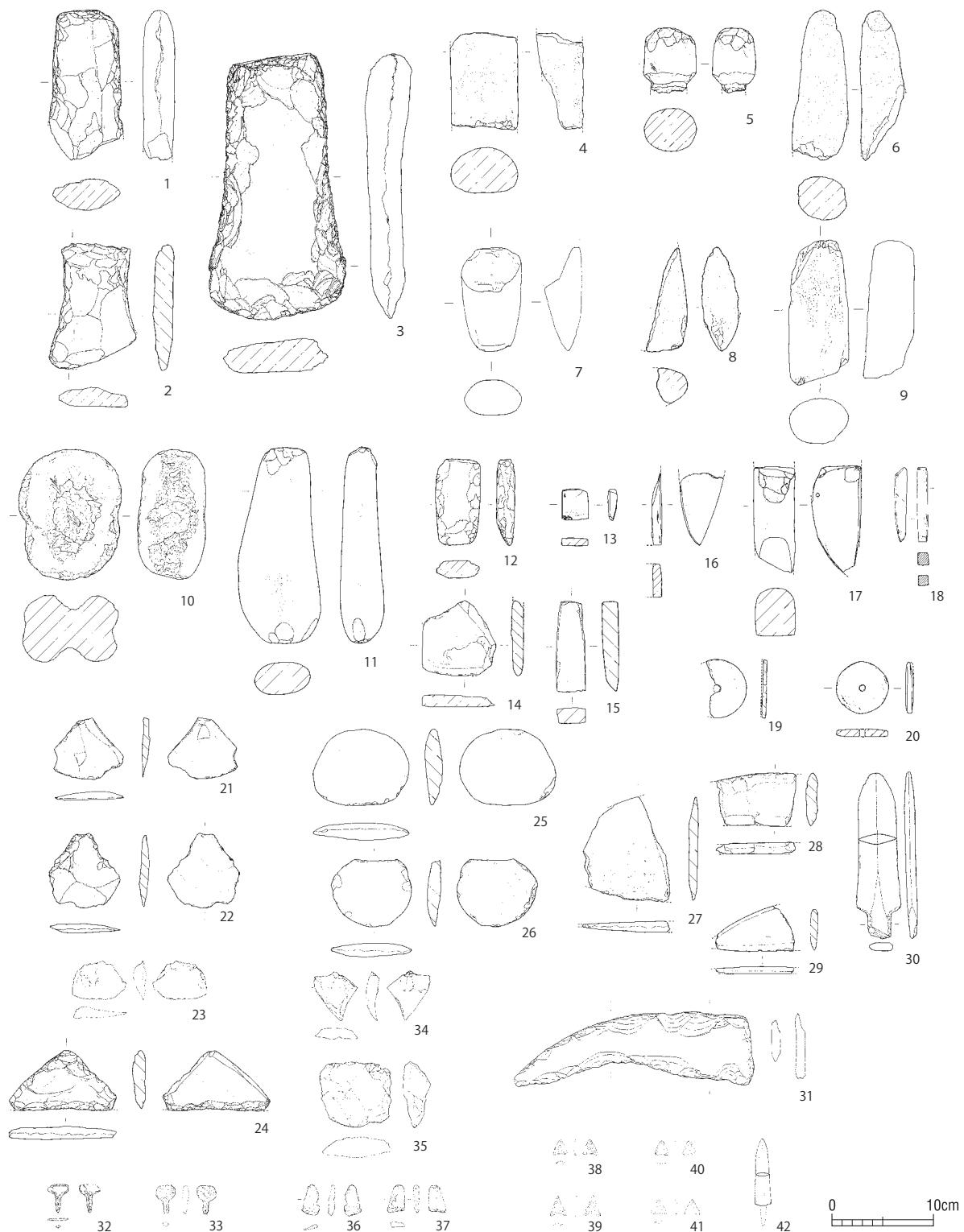
大陸系磨製石器は、弥生前期後葉（矢野3式）までに大型石庖丁、石庖丁、扁平片刃石斧、柱状片刃石斧、紡錘車が出現したと考えられる。それ以前の矢野1・2式に遡る可能性もあるが、断定できるものはない。大型石庖丁・石庖丁は、刃部がやや外湾するもの（27）と直線刃をなすもの（28・29）があり、直線刃をなすものが多い。柱状片刃石斧と扁平片刃石斧の出現は、下條信行や中勇樹により前期末以降と指摘されてきた。矢野遺跡第9次調査では前期後葉（矢野3式）の遺構から扁平片刃石斧（15）が出土した。刃部より基部がやや厚いものである。西川津遺跡出土の柱状片刃石斧は、刃部片である（16）。断面形が長台形で（下條分類B型式）で前期後葉に遡る可能性が高い<sup>(11)</sup>。扁平片刃石斧や柱状片刃石斧は、型式的特徴から弥生前期後葉に遡る資料はあってもわずかで、数は少ない。

前期末以降になると片刃石斧が増加し、伐採石斧の厚さが増す。新たに磨製石鎌や、石鎌が加わる。磨製石鎌（42）は有茎式で鎧が茎に通らない。断面形は紡錘形に近い。磨製石剣（30）は茎式で、鎧が茎に通らない。前期末頃のものであろう。石鎌は打製と磨製のものがあり、時期が確定できるものは前期末である。

以上、島根県の弥生前期の石器をまとめると、前期中葉から後葉にかけては、依然として縄文的な石器組成が主体をなす。前期後葉に大陸系磨製石器がわずかに出現し、前期末に増加、弥生的な石器組成になる。

#### 4. 出雲における弥生前期の木製農工具

本項では、出雲の弥生前期土器編年を軸に弥生前期の木器組成をまとめ、特に農工具についての実態を明らかにしたい。出雲の縄文時代の木器組成に触れたいが、ほとんどわかっていない状況である。



【出土遺跡】1・2・14・29・36・38：矢野遺跡 SD2626, 3・5：矢野遺跡 I・II層, 4・24・25：矢野遺跡 SK2866

6・8・10～12・19・26・28・35：矢野遺跡 V層, 7・9・31・42：鰐石遺跡, 13・16：西川津遺跡VII, 15：矢野遺跡 SK2750

17・20・34：矢野遺跡IV層, 18：タテチョウ遺跡III, 21：矢野遺跡 SK3149, 22・27・39：矢野遺跡 SK3157, 23：矢野遺跡 SD3094, 30：原山遺跡

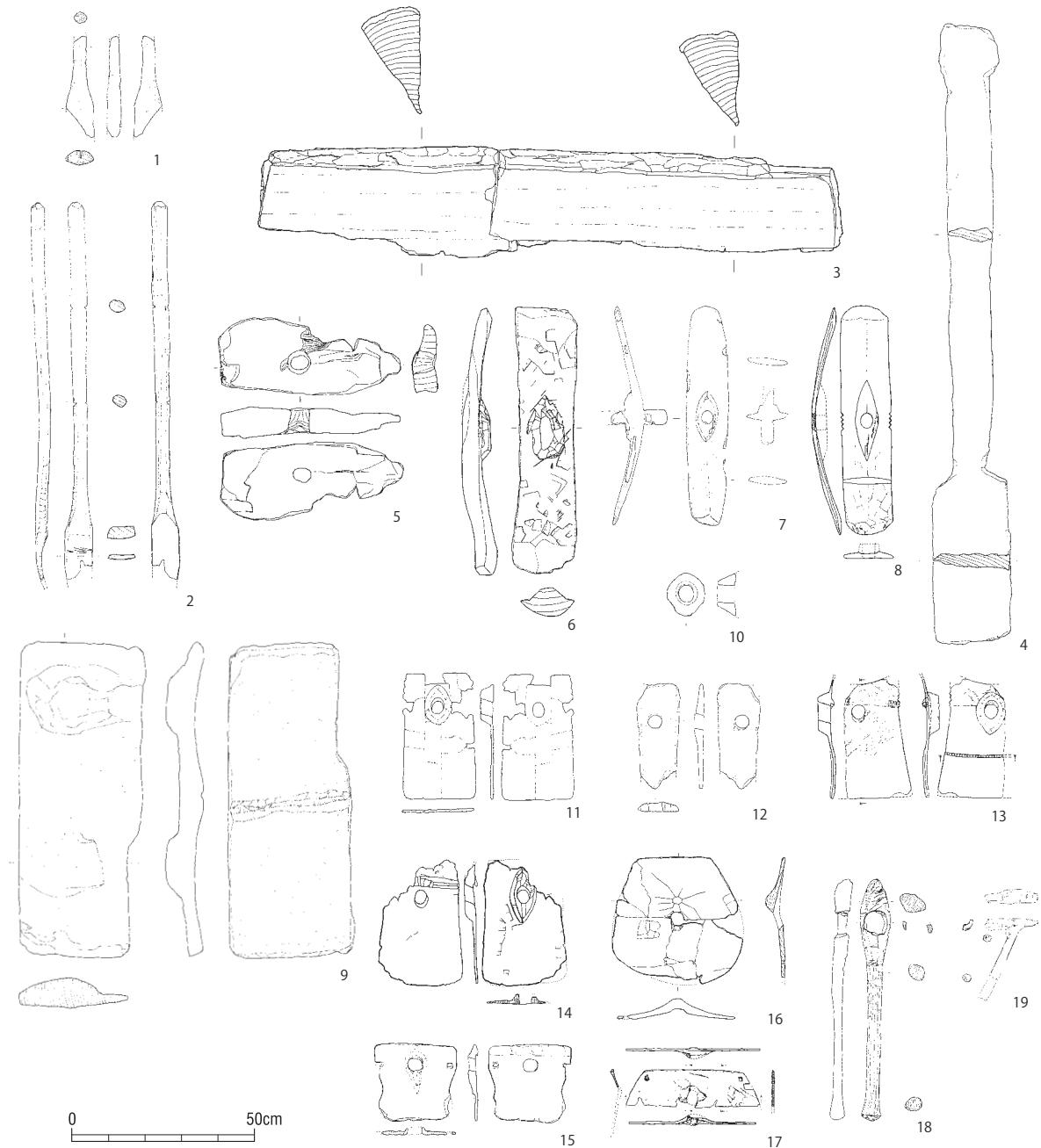
32：築山遺跡IV SX3198, 33：矢野遺跡1～3層, 37：矢野遺跡 SK2637, 40・41：矢野遺跡 SK2845

【種別】1～3：石鋸, 4・5：石棒, 6～9：伐採斧, 10・11：敲石・凹石, 12～15：扁平片刃石斧, 16・17：柱状片刃石斧, 18：ノミ状片刃石斧

19・20：紡錘車, 21～26：剥片石器, 27：大型石庖丁, 28・29：石庖丁, 30：磨製石劍, 31：打製石鎌, 32・33：石錐, 34：U形, 35～37：楔形石器

38～41：石鎌, 42：磨製石鎌

第10図 島根県の弥生時代前期中葉～末の石製品（1：6）



【出土遺跡】1：矢野遺跡IV層，2・6：タチヨウ遺跡II，3・9：矢野遺跡V層，4：三田谷I遺跡vol.2 SD03，5・11・15・16・18・19：

西川津遺跡V，7・14：西川津遺跡VI，8：西川津遺跡II，10・12：矢野遺跡I・II層，13・17：タチヨウ遺跡III，

【種別】 1：手鋤未製品，2：手鋤，3：ミカン割材，4：一木鋤未製品，5：直柄横鋤，6：直柄諸手狭鋤未製品，7・8：直柄諸手狭鋤

9：鋤未製品，10・11・13～15：直柄広鋤，12：直柄狭鋤，16・17：泥除け具，18：縦斧直柄，19：横斧膝柄

第11図 出雲における弥生時代前期の木製農工具（1：16）

したがって、他地域との資料の比較をもとに検討する。今回は弥生前期の木器組成を1つの様式としてまとめた<sup>(12)</sup>。時期が限定できない資料が多いため、弥生中期前葉までの資料も含んでいる。本稿では矢野遺跡第9次調査の資料を用い、また他遺跡の資料も合わせて検討した。島根県の弥生前期中葉～中期前葉の木器は、手鋤（1・2）、一木鋤（4）、直柄横鋤（5）、直柄諸手狭鋤（6～8）、直柄広鋤（9

～11・13～15), 直柄狭鋤 (12), 泥除け具 (16・17), 縦斧直柄 (18), 横斧膝柄 (19), 容器, 高杯, 匙, 火鑽臼, 櫛, 弓, 桜, 柱や垂木などの建築部材が出土している。

これらの中で、特徴がつかみやすい農工具の木取りと形態について検討する。木取りについて結論から言えば、弥生前期には縄文的な木取りと、弥生的な木取りでつくられた二者の農工具がある。縄文からの伝統的な木取りは、直径が30cm程度の径の小さい材を使うため、木目が弧状になる。弥生的な木取りは直径約50cm以上の径の大きい材を使用するため、木目が直線状となる。そして、弥生中期になると径が大きい材を使用したもののみになる。縄文的な木取りの例は、手鋤 (1) と直柄諸手狭鋤 (6) などである。弥生的な木取りの例は、ミカン割材 (3) と直柄広鋤未製品 (9) などである。3と9は矢野自然河道V層から出土したもので、弥生前期後葉 (矢野3式) までには大きな径の材を伐採し、直柄広鋤を生産していたことがわかる。9の直柄広鋤未製品は鋤が連結していて、個別に切断する前の段階で、舟形隆起を大雜把に作り出している。3のミカン割材は、約50cm以上の材を約1/8に分割し (1/16に分割したものもある)、各種木器の板状素材としてつくられたものである。このようなミカン割の素材は弥生時代になって多く出土するもので、径の大きな材を伐採し、各種木製品を大量に生産する意識が働いている。これは、縄文時代の木器生産とは大きく異なるものであろう。

次に、組成と形態的特徴をあげる。まず、手鋤 (1・2) がある。手鋤は縄文晩期からみられる器種で、縄文晩期の例として、福岡県雀居遺跡、香川県林・坊城遺跡がある。したがって、1の手鋤は前段階から継続してみられる器種である。そして、弥生前期中葉までに新たに受容した器種として、直柄広鋤 (9) などがある。鋤の形態的特徴は、舟形隆起が紡錘形に近いもので、高いもの (10) と低いもの (12・15) がある。直柄広鋤の平面形は、長方形のもの (11) と長方形であるが側面が内反りするもの (13～15) がある。また、側面に鋸歯状突起を施すものもある (13)。おなじ突起は直柄諸手狭鋤 (8) にもあり、このような装飾は瀬戸内にもみられる。直柄広鋤には泥除け具 (16・17) を装着する「ゲタ」がつくもの (13～15) がある。その中で、(15) は柄孔の横に小孔が開けられている。縦斧直柄 (18) は孔の大きさから、厚さ、重みを増した伐採石斧 (大型蛤刃石斧) を装着したと考えられ、前期末のものと考えられる。

以上のように、弥生前期の出雲の木製農工具を検討した。木取りには縄文的なものと弥生的な二者がある。また、縄文晩期から継続してみられる手鋤と弥生前期中葉までに新たに受容した直柄広鋤などが共存する。このような組成は、兵庫県玉津田中遺跡や滋賀県滋賀里遺跡でもみられる。したがって、木製農工具の組成や形態的な特徴は瀬戸内や近畿と大きな違いがないことがわかつてきた。

今回用いた資料の多くは西川津遺跡のものである。この遺跡からは、弥生前期後葉～前期末の土器が多く出土しているので、木器の多くはこの土器に伴うものと考えられる。

最後に、石器・木器についてまとめると、矢野遺跡では遠賀川系土器と少しの大陸系石器、木器に加え、縄文系の石器、木器も使っていることがわかった。基本的には、稻作が伝播し徐々に弥生化しているが、使用している道具までは完全に弥生化はしていないのが弥生前期の状況である。道具が完全に弥生化するのは、弥生前期末～中期初頭であろう。

## 5. 出雲における稻作文化の伝播過程

前項までに、出雲における弥生前期の土器、石器、木器の状況を明らかにした。これらの資料を用いて、出雲における稻作伝播過程を4段階にまとめた。

第1段階は、稻作が伝播した段階で、縄文晚期後半にあたる。粒圧痕土器や炭化米の出土から、水田による稻作が始まったと推定される。現状では、新たな道具類はみられないが、大型の石鍬が水田の開墾に使用された可能性がある。

第2段階は、弥生土器（遠賀川系土器）の伝播した段階で、弥生前期中葉（矢野1～2式）にあたる。矢野1式の分布をみると石見から伯耆まで、転々と遠賀川系土器が伝播したことが想定される。そして、縄文土器（無刻目突帯文土器）が共伴する遺跡もある。弥生前期中葉後半（矢野2式）は、土器の量や遺跡数も増え、徐々に稻作が浸透していく段階である。

第3段階は、新来（大陸系）の石器と木器が伝播した段階で、弥生前期後葉（矢野3式）にあたる。但し、大陸系の道具類の量はごくわずかで、縄文系の技術・道具を引き続き使用している。土器は、出土量が前段階よりも多く、分布も広がる。この段階までに、土器の器種組成の中で大型甕が減少し、堅果類への使用が減少したことがわかる。これらのことから、前段階よりも稻作が浸透したことがわかる。

第4段階は、新来（大陸系）の石器と木器の出土量が増え、道具の主体となる段階で、前期末（松本I-3・4）にあたる。稻作の内容・質が充実し定着した段階である。

以上のように、出雲の縄文晚期後半から弥生前期の稻作文化の伝播過程を土器・石器・木器から4段階にわけることができた。そして、稻作開始期の出雲は、出雲の縄文人が主体となって、新しい文化を段階的に受容していったことが明らかになった。

本稿では、道具類の型式組列を明確にし、時間の前後関係から稻作文化の伝播過程を検討した。今後の課題としては、出雲の道具類と他地域のそれらとを比較し、地域性の抽出作業が必要である。また、稻作に伴って新來した文化は他にもある。これらの資料を矢野編年を軸に検討し、出雲の弥生前期について明らかにしていきたい。

最後に、本稿を作成するにあたって、以下に方々にご指導や資料見学でお世話になった。記して感謝する。

青島啓、阿部智子、糸賀伸文、片寄雪美、勝部智明、川原和人、北島大輔、坂本諭司、佐藤睦子、下條信行、田崎博之、丹羽野輝子、花谷浩、濱田竜彦、藤田大輔、宮田健一、山口智子、和田みゆき

### 註

- (1) 出土状況については、第1分冊第6章遺構出土遺物の各遺構ごとに記述している。但し、これらの資料は、破片が多いため、1回の埋没とは限らず、数回にわたって埋没した可能性もあり得る。
- (2) 自然河道V層からわずかに縄文土器片が出土した。今回の編年の対象時期とは明らかに共伴しないため、流れ込みと判断した。
- (3) 鉢についても口径から大きさの区分を行った。鉢も甕や壺と同じ基準で区分できることがわかった。これらの土器は、大きさに対する規範があると考えられる。
- (4) 2010年2月に島根県埋蔵文化財調査センターが開催した、西川津遺跡の遺物展示説明会で、矢野3式が出土している溝から土笛が出土していた。報告書の刊行を待って、出雲における出現時期を検討したい。

- (5) 第9表は、遺跡の出現期を表したものではなく、突帯文土器と遠賀川系土器の共伴が明確な資料の時間的な関係である。そのため、矢野遺跡では、包含層から無刻目突帯文が出土している。この資料と矢野1式との共伴が明確になれば、縄文土器と弥生土器が共伴する時期となる。
- (6) 口縁部の形状変化を広域編年及び地域性の抽出に使えることを2000年に梅木謙一が証明している。筆者も、口縁部の形状が、東北部九州～山陰にかけて同じ変化をしていると考えている。
- (7) 矢野遺跡の弥生前期遺構出土の甕C類は中大型甕が約70%，大型甕が20%の割合であった。自然河道V層とほぼ同じである。
- (8) 矢野遺跡第9次調査の自然河道V層（矢野1～3式）からは、依然としてオニグルミなどの堅果類も出土する。
- (9) 矢野2式の壺には、胴部外面に大きな黒斑があり、土器焼成も野焼きから覆い焼きに変化したと考えられる。この焼成の変化も稻作に伴って伝播したと考えられる。
- (10) 石器・木器も土器と同じ4様式（矢野1～3式・松本I～3・4）に区分し、各器種の型式組列を明確にしてから、様式を設定する必要がある。それは今後の課題したい。
- (11) 小片で明確な型式認定は難しい。ただし、島根県内では最古になる可能性がある。今後の型式判定ができる資料の出土に期待したい。
- (12) 註10と同じ。

#### 参考文献

- 李昌熙 2009「在来人と渡来人」『弥生時代の考古学2 弥生文化誕生』204～224頁 同成社  
出雲市教育委員会 2009『築山遺跡』IV  
磯田由紀子 1988「山陰地方における前半期弥生文化の一考察」『島根考古学会誌』第5集1～16頁 島根考古学会  
伊藤照雄 1981『綾羅木郷遺跡』I 下関市教育委員会  
伊藤実 2004「土器の蓋」『考古論集（河瀬正利先生退官記念論文集）』375～394頁  
梅木謙一 2000「遠賀川系土器の壺にみる伝播と受容」『突帯文と遠賀川』959～981頁 土器持寄会論文集刊行会  
梅崎恵司 2000「東北部九州における弥生時代前期土器の変遷」『突帯文と遠賀川』217～254頁 土器持寄会論文集刊行会  
江川幸子 1997「弥生の土笛」『古代文化研究』第5号17～30頁 島根県古代文化センター  
大川泰広 2005「石器組成からみた山陰地方の地域的特性」『第16回中四国縄文研究会 縄文時代晩期の山陰地方』59～85頁  
鹿島町教育委員会 1989『北講武氏元遺跡』  
川原和人 1984「島根県における縄文晚期突帯文土器の一試考」『島根考古学会誌 第1集』1～10頁 島根考古学会  
小林青樹・岡田憲一・下江健太 2000「三田谷I遺跡出土縄文・弥生移行期土器群の諸問題」『三田谷I遺跡』Vol.3 81～96頁 島根県教育委員会  
小南裕一 2008「中国地方における無文土器関連資料と渡来系集団」『月刊考古学ジャーナル』2月号（第568号）23～28頁 ニューサイエンス社  
酒井仁夫 1987『大井三倉遺跡』宗像市文化財調査調査報告書11  
酒井仁夫 1984『葛川遺跡』苅田町文化財調査報告3  
榎原博英 1999「島根県鰐石遺跡出土の大陸系磨製石器類について」『地域に根ざして』16～32頁 田中義昭先生退官記念事業会  
榎原博英 2005「浜田市鰐石遺跡出土遺物」『古代文化研究』第13号 1～25頁 島根県古代文化センター  
佐藤由紀男 2000「甕・深鉢形土器の容量変化からみた縄文／弥生」『突帯文と遠賀川』1027～1062頁 土器持寄会論文集刊行会  
島根県教育委員会 1982『タテチョウ遺跡発掘調査報告書』II  
島根県教育委員会 2000『三田谷I遺跡』Vol.2  
島根県教育委員会 2000『三田谷I遺跡』Vol.3  
島根県教育委員会 2000『西川津遺跡』VII  
島根県教育委員会 2009『五丁遺跡』

- 島根県教育委員会 島根県教育庁古代文化センター 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006 『島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成』島根県古代文化センター調査研究報告書 33
- 清水真一 1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年』－山陽・山陰編－ 355～412 頁 木耳社
- 下江健太 2005 「山陰地方における突帯文土器の様相」『縄文時代晚期の山陰地方』中四国縄文研究会
- 下條信行 1989 「島根県西川津遺跡からみた弥生時代の山陰地方と北部九州」『西川津遺跡発掘調査報告書』V（海崎地区3） 325～340 頁 島根県教育委員会
- 下條信行 1996 「扁平片刃石斧について」『愛媛大学人文学会創設20周年記念論集』141～164 頁 愛媛大学人文学会
- 下條信行 1997 「柱状片刃石斧について」『古文化論叢 伊達先生古希記念古文化論集』72～87 頁 伊達先生古稀記念論集編集委員会
- 杉原莊介 1948 「出雲原山遺跡調査概報」『考古学集刊』第1卷 第1冊 1～7 頁
- 田崎博之 1994 「夜臼式土器から板付式土器へ」『牟田裕二君追悼論集』35～74 頁 牟田裕二君追悼論集刊行会
- 田崎博之 2000 「壺形土器の伝播と受容」『突帯文と遠賀川』737～792 頁 土器持寄会論文集刊行会
- 田畠直彦 2000 「西日本における初期遠賀川式土器の展開」『突帯文と遠賀川』913～956 頁 土器持寄会論文集刊行会
- 田畠直彦 2003 「山陰地方における綾羅木系土器の展開」『山口大学考古学論集』47～72 頁 近藤喬一先生退官記念事業会
- 中勇樹 2008 「弥生時代における片刃石斧の変遷と技法について」『地域・文化の考古学』179～200 頁 下條信行先生退任記念事業会
- 中川寧 2000 「出雲における木製耕起具の変遷について」『島根考古学会誌』第17集 73～98 頁 島根考古学会
- 中沢道彦 2005 「山陰地方における縄文時代の植物質食料について」『縄文時代晚期の山陰地方』109～131 頁 中四国縄文研究会
- 中沢道彦 2007 「山陰・北陸地方の植物遺存体」『日本考古学協会』2007年度熊本大会研究発表資料集』 366～374 頁 日本考古学協会 2007年度熊本大会実行委員会
- 長嶺正秀・末永弥義 1985 『下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書 第17集
- 西伯耆弥生集落検討会 2001 『山陰地方における弥生時代前期の地域相』 西伯耆弥生集落検討会
- 濱田竜彦 2000 「因幡・伯耆地方の突帯文土器と遠賀川式土器」『突帯文と遠賀川』349～380 頁 土器持寄会論文集刊行会
- 濱田竜彦 2005 「山陰地方における縄文時代晚期土器について」『縄文時代晚期の山陰地方』15～42 頁 中四国縄文研究会
- 濱田竜彦 2008 「中国地方東部の凸帯文土器と地域性」『季刊古代文化』第60卷第3号
- 濱田延充 2000 「遠賀川式土器の様式構造」『突帯文と遠賀川』1005～1026 頁 土器持寄会論文集刊行会
- 東森市良 1971 「山陰における農耕文化の開始」(1)『山陰史談』第3号 1～32 頁 山陰歴史研究会
- 東森市良 1972 「山陰における農耕文化の開始」(2)『山陰史談』第5号 1～25 頁 山陰歴史研究会
- 東森市良・前島巳基・松本岩雄 1977 『八雲立つ風土記の丘研究紀要 弥生土器集成』I
- 東森市良・西尾克己 1980 「矢野遺跡」『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』31～39 頁 島根県教育委員会
- 藤尾慎一郎 1999 「中・四国地方の弥生I期突帯文系土器」『蔵小路西遺跡』251～260 頁 島根県教育委員会
- 藤尾慎一郎 2000 「出雲平野における弥生文化の成立過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』83集 97～127 頁 国立歴史民俗博物館
- 前島巳基 1977 「粉痕のついた縄文式土器の破片」『季刊文化財』第31号 19～23 頁 島根県文化財愛護協会
- 松本岩雄 1992 「出雲・隱岐地域」『弥生土器の様式と編年』－山陽・山陰編－ 413～482 頁 木耳社
- 松本岩雄 1992 「石見地域」『弥生土器の様式と編年』－山陽・山陰編－ 483～519 頁 木耳社
- 豆谷和之 1995 「山口県弥生土器集成」I 『山口大学構内遺跡調査研究年報』XIII 103～116 頁 山口大学埋蔵文化財資料館
- 宮田健一 2007 「島根県津和野町縄文遺跡の調査成果」『縄文後晚期の西部瀬戸内地方』19～24 頁 中四国縄文研究会
- 村上勇・川原和人 1979 「出雲・原山遺跡の再検討」『島根県立博物館調査報告』第2冊 1～37 頁 島根県立博

物館

柳浦俊一 1994 「島根県の縄文時代後期中葉～晩期土器の概要」『島根考古学会誌』第11集 25～38頁 島根考古学会

山崎純男 1980 「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『鏡山猛先生古稀記念 古文化論叢』117～192頁 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会

山崎純男 2007 「九州における圧痕資料と縄文農耕」『日本考古学協会2007年度熊本大会 研究発表資料集』344～353頁

山田昌久 2003 『考古資料大観』第8巻 弥生・古墳時代 木・繊維製品 小学館

山本清 1964 「山陰地方Ⅱ」『弥生土器集成本編』1 41～43頁 東京堂出版